ここが知りたい⑥

ミャンマービジネス

天災リスク 日本の経験 生かし克服

山田 聡（やまだ さとし） 氏

新日本有限責任監査法人
エグゼクティブディレクター

官公庁や民間企業からの委託を受けて、アジア新興国関連のプロジェクトに多数従事。日銀、民間シンクタンクでエコノミストとして経済分析に長く携わった経験を踏まえて、マクロ経済やインフラ整備に関わる調査・分析を専門とする。

ミャンマーに進出する日系企業は、地盤の確認や保険の活用などのリスク管理が重要になる。こうしたリスクへの対応支援の可能性、ビジネスチャンスは大いにあるのではないか。

◇

ミャンマーはインド、中国、タイなどの成長が著しい国々と国境を接する交通上の要衝であり、進出企業に注目されている。しかし、地震や台風、南北に流れる大河の洪水等の自然災害のリスクがあることは知られていない。特に台風は要注意だ。最近では2008年のサイクロン・ナルギスが大被害をもたらした。豪雨、河川氾濫、高潮により、ヤンゴン周辺のデルタ地帯を中心に死者・行方不明者合計で10万人を超えた。

▲……外資投入が進み、建設ラッシュに沸くヤンゴン市内

気象に詳しい方は、意外に思われるかもしれない。低緯度帯のベンガル湾の東に位置するミャンマーを台風が直撃することはないのではないかと。通常は北半球の低緯度帯で発生した台風は北西に向かい、中緯度帯に入った後、偏西風により北東に針路を変える。日本に上陸する台風の軌跡を思い浮かべてもらえれば理解しやすいだろう。ところが、低緯度帯にあるミャンマーでは時として、西のベンガル湾で発生した台風の直撃を受けることがある。これは、ミャンマーの北西にあるヒマラヤ山脈に偏西風がぶつかり、その一部が南に大きく蛇行して、ベンガル湾上空にまで達することがあるからだ。この蛇行した偏西風に運悪くベンガル湾上で発生した台風が出会うと、その台風は東のミャンマーに向かう。典型例が上述したナルギスである。

今後進出を検討している企業は、進出先の地盤の確認や、保険によるリスクカバーなどのリスクマネジメントを検討するべきだろう。天災リスクを考慮しても、隣接する中国、インドなどの市場、低廉な労働力を考えればミャンマーは魅力的だ。

わが国は地震、台風等の天災リスクに常に向き合ってきた。11年3月11日の東日本大震災からの復興は、いまだ途上であるが、これまで数々の天災を乗り越えて経済発展を遂げてきた我々の経験は、これから経済を発展させようとするミャンマーに参考になるかもしれない。特に災害に強いインフラ整備（鉄道や道路などの交通網、エネルギーネットワークなどの分野）に関しては、さまざまな協力の可能性がありそうだ。日本政府は、日本企業の技術を活用したインフラ輸出を積極的に推し進めようとしているが、発電所や空港等のハードインフラだけでなく、災害対策の法制度整備に関する支援のニーズもあるかもしれない。

12月に日本政府関係の団体の招聘（しょうへい）で来日したミャンマー商工会議所の幹部が、多忙なスケジュールの間を縫って川口東ロータリークラブの会員との面会を強く希望した。08年のナルギス禍の際に、同クラブから大量の衣類などの支援物資が送られたことに対する御礼を伝えたい、と。ミャンマーの関係者は日本の支援を忘れていない。

（木曜日に掲載）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社